

【研究論文】

保育における乳幼児の身体の営み

帰山 俊二

要 旨

子どもの遊びにおける身体の営みは、その子の育ちにどのような意味をもたらすのか。あじさい保育園の保育実践は、育ちと身体の営みの関係について多くの示唆をもたらす。この世に生を受け、そして始まる生きるための営みは、己れの身体を抜きに語れない。身体は、命を育むために周囲の世界に依存し、対応能力を獲得し発揮していく。この当たり前すぎる育ちの一端は、育ちを促す保育の場においても重視すべきことである。

自然と交わる遊びは、身体を自然に適合させるために今ある力を存分に活用し、遊びの渦中で新たな能力を身につける。そして、新たな能力はさらに遊びに還元されていく。

キーワード

保育実践, 乳幼児, 身体の営み, 遊び, 自然

ABSTRACT

The physical activities of infants during play have a highly significant impact on their physical and mental development. Early childhood care and education practices at Ajisai Day Nursery School offer many potential insights into the relationship between children's activities and their physical development. Activities promoting healthy living, which begin the moment we are born, are intimately related to our bodies. Our bodies rely on the surrounding world in order to live, and they acquire and manifest abilities in response to that world. This relationship is easily taken for granted, but it should be focused upon in the field of childcare in order to stimulate children's development.

Playing in contact with nature helps children make full use of their capacity so as to adapt their bodies to nature, and to develop new abilities; and children use these newly developed abilities in further play.

KEYWORDS

Early childhood care and education practices, infant, physical activities, playing, nature

はじめに

「からだのみなさん」という五味太郎氏の絵本がある⁽¹⁾。この絵本には、子どもの生き生きとした、躍動する身体が描かれている。身体で感知し、考え、判断する世界をもの見事に表現している。子どもとるに足らない行為の連続を描き、そこにはストーリーは見出せないが、内側のドラマが息づいている。ひとりの男の子が登場する。「なんとなくぼんやりあるいておりますと…」から始まり、「(おや? これなんだ!?) ととつぜんゆびがいます。」とポケットに手をつっこむ姿が現れ、その表情は何か起きることを予兆させる。何よりも、我が身ひとつをさらす存在感が際立つ。そして、「ゆび」が「アメ」に触れる。その途端である。「(あっこれこのまえもらったアメだ!)とあたまがおもいだしていいです。」「(ずいぶんよごれてる…ほこりなんかもついてるし…)とめがしらべていいです。」「(それにすこしとけてる。もうダメだねこれ)とゆびさきがたしかめていいです。」「(いやいやダメじゃない。まだたべられるぞこれ)とくちがあわてていいです」とページが続く。カッコ内は、その子の一瞬に変わる心模様か。「あたまがおもいだし」「めがしらべ」「ゆびさきがたしかめ」「くちがあわてていい」と生身の瞬時の身体感覚がこの子を支配する。

少しページをめくろう。「(ひざしもつよいけれどこのシャツがあついんじゃないの?)とせなかがいいです。」「(そうそう!)とくびもうでもいいです。」とつぎつぎと着ているものを脱ぎ捨て「ちょうしにのって」素っ裸になる。その気持ちよさ。そして、ふと「(や、やばい)」「(はずかしーい!!)」と我が身を振り返る。この場面でも身体感覚にゆだねた振る舞い、実感の世界を自在に生きるさまが跳躍する。この身体感覚は身の内に起きる事ではあるが、同時に「(はずかしーい!!)」と他者のまなざしを意識することを含んでいる。羞恥の感覚は、その子を取り巻く規範に照らし生まれる真っ当な感情である。奔放な身体が発した恥の感情は、「からだのみな」が快に浸った後に訪れる。著者は、その恥を快の感情を抑制するものとして描いてはいない。快と恥が拮抗し、いずれかを優先するという理性的な判断ではなく、快を満喫した後の自然な身体反応として「あわてて」いる様を描いている。次の場面、そこに「(ほっシャンプーのいいかおり…)」をした「(あのこ)」が現れ、「おちんちん」を隠す。「(あのこ)」は露出をたしなめたのであろう。しかし、男の子は「(シャンプーのいいかおり…)」を嗅ぎ、「(あのこしんせつね…)」などとむねがいて、反省するどころか、あの子の「かおり」と「しんせつ」に我が身を解き放す。男の子の「からだ」は、咎めるまなざしに絡むことなく、内側に組み込まれた感覚に根ざして振る舞う。男の子のリアルタイムの心象は、咎められたことを脇におき、「いいかおり」へと向かう。

この絵本は、まだ続く。少し飛んで最後のページをみると、男の子がベンチに横たわり「からだのあちらこちらが またかってに なにかいって」いるところが描かれている。たとえば「あ、かぜがふいてる…」とか「せなかがいいきもち…」とか。そして、表情は満足気で眠たそうであ

る。

この絵本にある男の子の身体は、「からだのみなさん」を切っ先とし能動的に身の周りとかかわる。身体こそが、世界を獲得し広げる。未知としてある周囲とのかかわりは、我が身をそこに置くことで始まる。状況は、その子の存在によってしか生まれない。もう一つ、この絵本が示唆するところは、子どもの内側を理解することの難しさである。推測や解釈は許されるが、それ以上のものではない。しかし、そう思いつつも推測や解釈に寄りかかりその子を理解したつもりでいることが多い。読み手には、絵本のカッコ内の言葉は、とてもまぶしい。なぜなら、身体をくぐったその瞬間に発した言葉だからである。したがって、推測や解釈といった事後的理解とは次元の違う直接性が言葉ににじむ。そして、その言葉と不離一体に表情やしぐさが弾ける。

以上のような身体の営みを保育として実践している園がある。北海道帯広市にある社会福祉法人弥生福祉会あじさい保育園の保育がそれである。園では、「遊び・自然・働く・体づくり」を重視した保育⁽²⁾を軸に展開しているが、そのありようの一部を「身体の営み」として整理する。なお、あじさい保育園の実践は、多様なテーマのもとに論考すべき対象であり、本論はその一端にすぎない。

さて、この身体について岡本夏木氏は幼児期における「遊びの身体性」について次のように述べている。「子どもは世界の中へ、まず「身体」として生み出されます。それは客体化され、対象化され、意識された解剖学的身体ではなく、生きてゆくべき世界に向けての「生」の可能態として投げ出された身体といえるでしょう。」。そして、「その身体を足場に人間にとっての「環境世界」が形成」されるが「子どもが世界をつかむための出発点は「身体」というよりは「身体性」と呼ぶ方が適切」とし「特に遊びは身体性と密着して展開」されてゆく⁽³⁾。氏はさらに言葉を継ぎ、幼児期における「身体(性)」に根ざす現実との交渉と経験を重視すべきと論を展開する。また、佐藤公治氏も身体は、「客観的な分析対象としての身体ではなく、自己の環境と関わる主体の行為や意志、情動の具体的な体現としての身体であり、人間精神の具体的単位として位置づけられるべきものである。」とメルロ＝ポンティの理論を解説しながら主張する⁽⁴⁾。両氏が共通に指摘しているのは、幼児期においてこの「身体」経験の縮小化が進み、「環世界」⁽⁵⁾の抽象化が肥大していることである。

以上の育ちをめぐる「身体」のとらえ方を基底におきながら、あじさい保育園の実践を考察する。

1. なぜ、あじさい保育園なのか

「あじさい」というあじさい保育園創立30年記念誌がある⁽⁶⁾。このなかに当時の園長であった平山繁男氏が作成した「保育園設立のありかた」(1978年)の一部が紹介されている。それは、「人間が生きている以上それ自体が自然だ。自分は多くの自然の経験者である。……だから自分

が子供であった時代のことを考え出してやればいい」という文章である。これは、園の理念としてある「自然を愛し 未来を切り拓く たくましい人間像をめざして」という保育理念につながる⁽⁷⁾。この理念については、別稿で改めて取り上げたい。ここで着目したいのは、「人間が生きている以上それ自体が自然だ。」という考え方である。「人間」を自然的存在としてとらえ、子育て・保育の中心にすえている。

では、子育てにおける「自然」とは何か。浜田寿美男氏は、「子ども学序説」において幅広い研究・実践を糧に「子どもの自然」について踏み込んだ論を展開している⁽⁸⁾。その意味するところは、全体の脈絡のなかで理解すべきであるが、「序章」に基本的な考え方が示されている。たとえば、「胎内から生まれ出たばかりの子どもは丸裸で、なに一つ文化的なものを身にまもってはいないということ。母胎という自然に^{はぐく}まれ、そこから生み出された自然そのものである。人の出発点は、みな、そこにある。それはすべての人に課せられた人間の初期条件である。」。そして、「文化」については、「子育ての基本は自然に支えられたプロセスである。そしてこの自然のプロセスをくるむようにして育児の文化が多様に作られてきた。」。しかし、「文化が独自の論理で動きはじめたとき、その行き着く先は」「自然をよりよく充足させるどころか、逆に自然とすれ違い、これを裏切る事態が生まれてくる。」と指摘している⁽⁹⁾。浜田氏は「子育てとは子どもの自然とおとなの文化の出会いの場所」とも言う⁽¹⁰⁾。あじさいの保育は子ども元来の自然的諸力に絶対的な信頼を寄せ、子どもの「自然そのもの」を育むことに努める。浜田氏は先の著書で「息をする、お乳を飲む、排泄する、手に触れた物を握る…、その力はすべて、それらを使って生きる世界と組み合わせられて、意味をまっとうし、「力はそれを使って生きる世界とセットで展開する。これも自然の一つである。」と述べている⁽¹¹⁾。「息をする」ことは、傍らにいるおとなへの依存があつて為し得ることであり、生得的なことでもあるが、「お乳を飲む、排泄する」一つひとつが生きる力の発現で、こうした「自分の手持ちの力」を発揮することが結果として生活世界を創り出す。

さて、「保育園設立のありかた」にある「自然」は北海道のあるいは道東の雄大で豊か、かつ過酷な自然と歴史が背景にあるのは明らかで、理念の「自然を愛し」にも結びつく。あじさいの子どもたちは、特異としてではなく日常的にこうした自然に直接身をさらし、自然のなかで過ごし、自然を相手に遊ぶ。保育者は、自然的存在としての子どもの特性と能力を信頼し見守る。人の生きる原初の姿は自然性と身体性にあつたが、おとなになる過程で忘れ去り、遠くの彼方に追いやったものである。単なる遊びの環境としてではなく、乳幼児の内なる自然性が外界としての自然と切り結ぶことによって獲得する能力に意味を見出そうとしている。あじさいの保育は、我が身に抛らなければ何も始まらないということを徹底する。先の30年記念誌には、「自然の中にはあそびを発展させる要素がつきません。その自然をどのように開拓し活用するかが保育の課題」とされ、「実践を積み重ねながら、自然を創造的に活用する保育を追求していきたい」と述べている⁽¹²⁾。あじさいにとっての自然とは、外側にある客観的な自然ではなく、子どもの遊びの対象であり、生活を営むための諸力を養い、人間関係を培う根幹に位置する。

2. あじさい保育園の概要

あじさい保育園(1978年4月設立、当時の定員90名)は、定員120名で6クラス(にじ、ほし、つき、そら、やま、うみ)編成である。2008年に現在地に移転し園舎が新しくなった。また、法人としては市の保育園公設民営化に伴い2003年に「こでまり保育園」を設立し2005年には「児童保育センター」(学童保育)を4か所運営している。

保育実践では、先に述べた通り「遊び・自然・働く・体づくり」を核とし「裸足保育」「泥・水遊び」「雨の日の散歩」「冬の外遊び」「リズム遊び」などは、日常的に見慣れた遊びの光景でとなっている。その上で行事として「キャンプ(年長児)」、「けんこうまつり」、「あじさいまつり」などを行い、親子では「ふきとり」、「夏まつり」、「親子そりえんそく」を楽しんでいる。また、食や働くことに関しては、「給食の皮むき手伝い」「お米とぎ」「野草利用のクッキング」「畑づくり」「玄關掃除」「チャボの飼育」などを行っている。さらに、この園では、「父母の会」と「紫陽会」(卒園児親の会)がありさまざまな保育実践に加わり、子どものみならず親もともに育つ関係を重視している。その関係は卒園後も続き、園の活動を幾重にも分厚く支える。また「クラス会」や「15歳のつどい」があり、「つどい」は当時を懐かしむとともに、15歳の揺れのなかで、かつての保育者や仲間とともに自分に帰る機会でもある。

これらの活動は、子どもそれぞれの育ちにとって個別・具体的な意味合いを持つと同時に分かちがたく関連し総体として心身の成長に寄与する。

3. 冬のある夕方、子どもの遊ぶ情景

夕方のひととき、冬の園庭に子どもたちの声が飛び交う。園庭につくられた築山は冬になるとソリ遊びの場所となる。凹凸のある斜面、凍りついた箇所もある。防寒着を着た子どもたちが一人乗り、二人乗りのソリを携えてトップに立ち、一瞬見渡し他の子どもと衝突しないことを見はからい滑っていく。ひっくり返ったり、転がったりするのは織り込みずみである。つまりは、それを楽しんでいる。身のこなしは教えられたものではなく、繰り返し雪まみれになることで身体に浸みこませてきた。ソリ遊びのスピードやスリルは飽きない。冬のそり遊びは園庭内のみならず、近くの公園や斜面のあるところでも行われている。雪が降り、凍てつく環境でも日常は変わらない。夕暮れは早い、園庭での子どもたちの声は絶えることがない。

このようなソリ遊びの様子を眺めていると、園庭であろうと近くの遊び場であろうと子どもたちは何のためらいもなく我が身を雪のなかに投げ出しているように見える。現在の自分をかたどる身体感覚は、ソリ遊び体験の渦中にある不安やおそれに対峙し、乗り越え、刻みこんできたものではないか。ソリ遊びと一くくりされる現象のなかに、個々の子どもは、それぞれの具体的

な体験を持ち、その内実を身体に意味づけることで、こともなげにソリ遊びを楽しむようになる。至る過程では、先行して楽しむ友だちの姿や保育者の励ましなどが支えになったことは容易に想像できる。そして、これら精神的な要素も、ソリで遊ぶ身体に一元的に凝集されてきたのではない。繰り返しの体験、寄り添うまなざしや励ましは、身体を冬の自然環境とかかわる主体に還元する。ソリ遊びを「体現する身体」は、その子の意志とそれを支える関係性、ソリという道具を使って滑るための工夫、楽しみを飛躍させるための試みのなかで生成されてきたものである。一見、同じことの反復としてみえるが、そこにおもしろさの質的变化があるのは確かである。

ソリ遊び全体を視野に入れると、同じ遊びの相が広がるだけでなく、そこには快の情動が共有化されていることに気づく。現に遊んでいる場と現在性を示す時間と関係性を示す仲間によって創出された時空がそこにある。保育内容に視座を置くと、自然環境を対象とした遊びとしてたとえば環境構成(場と時間と仲間そのものが環境を構成する要素でもある)の課題として解説するのは、そう難しい事ではない。それよりも注視したいのは、一人のソリ遊びの身体が開示する世界とそれらが凝集したときに立ち現われる時空である。つまり、個別ソリ遊びの身体は、我が身体として閉じられることなく、他者との関係性という異なるレベルの世界を鮮やかに発現する。自分の身体だけが頼りのソリ遊びは、格別のスピード感やスリルなどをもたらす。この体感、他児が滑る姿に関心をもたらし、そのスピードを想像したり、滑り方を真似たり、あるいは競ったり、絶えず他の身体と交叉し、関係性の世界を表象する。

さて、ソリ遊びに防寒着は必須である。子どもたちは、散歩であろうと遊びであろうと、その都度着脱し片づけることを反復する。この着脱は、単に繰り返すことで習慣化したのだろうか。遊ぶ楽しみが待ち受けているからこそ外着を身につけることに素早く、また遊びの充実感があるから脱いだあとの片づけを嫌がらない。遊びと生活習慣との間には支え合う相互性が成立しているように思える。

一方、乳児のいるにじぐみ(0歳児)では、ゆったりした時間が流れていた。座りながら周囲に視線を漂わせている子、他児の様子をじっと見つめる子、保育者のまなざしやことばがけに呼応する子、いずれの子も周囲への関心でいっぱいである。乳児室に不可欠な調乳や沐浴などの機能とともに、乳児の生活に必要な安心感と落ち着きが漂う。乳児室にあるおもちゃは種類も数も多くはない。この時期の育ちを助ける視点から吟味したものが最小限備わっていれば良い。なぜなら、乳児にとっても「自然」にある「遊びの要素」は尽きないからである。あじさい保育園の園舎には移転前も同様であったが玄関を入るとすぐに広々とした吹き抜けのオープンスペース(ホール)がある。そこは、個々の遊びを保障する場であり、クラス単位の活動や園行事にも活用されている。園舎全体の真ただ中で保育の要として機能している。乳児たちも例外ではなく、乳児室の静と異なる空間を満喫している。乳児であっても、もちろん園庭でも遊ぶし近くの札内川で川遊びもする。すでにこの時期、多様な体験を積み重ねている。

さて、乳児の部屋では一人の子が小さなすべり台を相手に格闘している。階段をのぼるためにお尻をあげて足を踏ん張り、体を支えるために手に力を入れる。だが、その手足をすぐ上にもつ

ていくことがなかなか出来ない。保育者はしっかり励ますが手は出さない。その子が「手持ちの力」を発揮しようと意欲をたぎらせている時間を邪魔しない。その子はこの時間をくぐり抜けることで、新たな「手持ちの力」を蓄える。この瞬間に子どもが体験しているのはどのようなことなのか。手を伸ばし、足を持ち上げることだけが目的のすべてであるとき、そこに立ち会う保育者はその心情に寄り添って声をかけ、目的を達成したときにはともに喜ぶ。ぬくもりのある部屋で、お乳や食があたえられ、オムツをかえてもらい、着替えに身を委ねるなど、依存的生の営みの一方で、自立的に自分を押し出すことを混在させながら現在を形づくっていると見えよう。

さて、にじぐみの印象について、ゆったりとした時間が流れていると書いた。では、保育の営みに見出すゆったりとした時間とはどのような意味をもつのか。内山節氏は、「時間についての十二章」で「関係的時間と客観的時間」について考察し、「時計の動きに表現されているような客観的時間」とともに「関係的時間」について次のように述べている。「この時間は、他者によってつくられることもないし、自己によって生みだされることもない。互いに関係し合う主体が創造するものである。そして、主体とは、多くの人々が誤解しているように固有のものとして成立するのではなく、ひとつの関係のなかに存在している。」。さらに、「この時間世界は、主体が剥離されていないがゆえに、人間の存在の外部にたつことはない。それは自然的で同時に人間的な穏やかな時間である。」と説く⁽¹³⁾。すべり台との格闘場面は、その子と保育者との「関係的時間」を示唆する。その「関係」とは、今ここに格闘する姿とそれが育ちにつながることを察知した傍らにいる者との絡みそのものである。

4. ある日のリズム遊び

子どもたちがオープンスペースでリズムを楽しんでいる。その様子を素描しつつ、そこで何が育まれているかを考察したい。私は、保育活動としてある「リズム遊び」についての専門的知見を有さない。保育用語辞典によると「音楽に合わせて動いたり即時反応をする、動物や身近なものをイメージして身体表現をする、リズム楽器を使って合奏をする、手拍子や身ぶりをつけて歌う、音楽遊びをする、ダンスをするなどの活動」であり「幼児が身体にもっているリズムを解放し、しだいに周囲の動きや音楽に同調していく」遊びであると説明がある⁽¹⁴⁾。だがここでは、保育における常識的理解に頼らず気づきやおもしろかったことを記述してみたい。子ども全体の動き、個々の動き、保育者の様子、それらが統合化された活動の意味などを取り上げる。

最初はまだおむつをした1歳児が現れ、保育者がピアノを弾き始めた。スタートの合図があるわけでもなく、一歳児の身体の動きが思い思いの場で始まる。身振りや表情に合目的性があるわけではなく、何かを成さんがための動きではない。また、何かを表現するための身体でもなく、身体を唯一の意志として自分を解き放つ。一人の男の子は、ピアノを弾く保育者のそばでじっとしている。ある子は、同じフロアで身体を動かさず保育者の様子を見つつ、少しずつ身体をくね

らせ始める。ピアノの音とともに子どもと保育者、子ども同士が感応する。保育者は子どもたちを意図的にリードすることなく、ほほ笑み、軽やかに動き、子どもとの身体を介したコミュニケーションに専心する。同調した動きが広がり、身のこなしが「共振」⁽⁴⁵⁾し始めると、そこに楽しさや喜びが行き交う。ふとみると、ピアノを弾く保育者のそばにいた子が、いつの間にか手をゆらゆらと空にあげて身体を揺らし始めている。

次に3歳児が集まり、ピアノのリズムに合わせて身体を動かし始めた。十分に慣れ親しんだ世界のような。身体の動きに共通性はあっても、表現は個々のものであり、基本パターンはあるようだが形にこだわっていない。ピアノのリズムに反応しながら20数名の身体の動きは微妙に異なる世界を構成する。それを全体的に眺めると、異なる世界どうしが反響し合い新たな次元を創りだす。先ずピアノに対する個々の身体の反応と表現があり、それが一同に集合すると一つの作品を成すような具合である。動きは多彩で、静と動、さまざまなステップ、歩く、走る、跳ねる、くねらせる、転がる、手をつなぐ等々、自在に想像の世界に遊ぶ。身体の器官と機能を十二分に発揮しており、その分野に詳しい者であれば専門的な解説が可能であろう。その流れのなかで、保育者はたくみに次の遊びをもちかける。例えば、童歌の「大寒小寒（おおさむこさむ）山から小僧が飛んできた なんとって飛んできた 寒いって飛んできた」と声を合わせ、集団遊びに移行したり、遊びのひとまととして「もういいかい」と厨房に声をかけ、お昼の準備を聞いている。これらはリズム遊びからの一連の流れで展開する。この子たちは、リズム遊びの前にソリ遊びを楽しみ、そろそろお昼をむかえる。

5. ある年の「けんこうまつり」

この日の「けんこうまつり」⁽⁴⁶⁾は雨のため、園庭ではなく近くの小学校の体育館をかりて行われた。

体育館に響く足音がだんだんと力強くなり、「ハレの世界」⁽⁴⁷⁾の始まりを告げる高揚感が漂う。0歳児「にじぐみ」の親子が入場し、続いて1歳児「ほしぐみ」から5歳児「うみぐみ」の子どもたちが順次登場。全員が名前を書いたゼッケンを胸につけ、ゆっくり歩き、勢いよく走り、床を踏み鳴らす。視覚世界を閉じ、耳で聞いてもその姿が浮かぶ。

それに先立つ開会式での太鼓の音とリズム、バチを握るスタッフの姿。あじさいの行事には欠かせない、いわば恒例の姿である。あじさいでの太鼓は、見慣れた光景の一つであるが、この時はまさにこれから始まる子どもたちの挑戦を鼓舞するものであった。

園長は、「できたか、できなかったではなく頑張る姿を見てほしい」、「発達の様子を見てほしい」と声をかけ「けんこうまつり」は、「健康を親子で喜び、楽しむ」祝祭であると挨拶した。

会場全体は、「けんこうまつり」の一文字一文字が飾られているだけで、その他一切の装飾がない。また、運動会には付き物の音楽もなく、子どもの心身にスポットをあて、一人ひとりの舞

台を際立たせようとする環境であった。子ども一人ひとりを焦点化し、主人公として照らし出そうとする意図は随所に見られる。例えば、先のゼッケンがそうで固有名詞のついた紛れもない個としての存在をアピールし、と同時にしっかりと他者の注視を浴びるよう演出もしている。アナウンスも一人ひとりの名前を出し、今日に至る様子を紹介し、個としての主体に光をあてる。

「おおきなあ〜れ」（にじぐみ親子：0歳児）では、ハイハイしながら小さなすべり台を登る姿が見られた。興味ある対象に視線を向けて思うがままに移動する姿は、恐らく日常の保育をそのまま映し出しているのだろう。傍らに愛着の対象である母親がおり、より安心して自己を発揮できたのであろう。乳児期の月齢に応じた育ちの一例であったが、あたかもテキストに描かれているような姿がそこにはあった。「えんそくにいこうよ〜♪」（ほしぐみ：1歳児）は、保育者が板で坂をつくり、そこを登るのであるが、板を握る手と踏ん張る足が必死で、その手と足に強い意志を感じた。この臨場的世界の積み重ねこそが、育ちを促す源なのだろう。「それゆけ☆つきぐみ!!」（つきぐみ：2歳児）の跳び箱はおもしろかった。その子の身体能力をフルに発揮して挑戦する様が伝わってきたからである。個人差はもとより当然である。我が身ひとつを武器に跳ぶ。跳び方はいろいろでよい。しかし、跳ぶために頼りになるのは身体だけであるという事実。とてもわかりやすく、具体的に直接的である。跳ぶ動作を解説できる者は、知識として技術として、跳び方を教えるだろう。跳ぶためにはそのような援助も必要だろうが、子どもたちは遊びのなかで自然に身についた身体能力を総合的に駆使して跳ぶ。遊びや生活と切り離されたところで跳ぶための知識や技術が求められているわけではない。遊びのなかで培われた身体能力と心情・意欲などを生かす場面としてこのプログラムがある。それと、挑戦というのは、予想がつかず、結果が不透明だからこそ意味ある言葉になると学んだ。だから結果に対する誇りが生まれる。

「いっしょにね!」（そらぐみ：3歳児）は、2人1組のリレーで呼吸を合わせ、歩調を合わせるというパートナーを意識したものであった。2歳までの活動は、個別の身体性を前面に押し出したものであったが、3歳の「いっしょにね!」はそれに加えて「ともに」、「補う」、「合わせる」、「通わせる」といった関係性がテーマになっているのではないか（勿論、3歳未満の取り組みにも、この関係性は存在する。）。でも、身体と切り離されたところではなく、身体を通して、気持ちを通わせる。まして、この場合リレーであるから競い合うという要素が加わり、より早くと相手の呼吸に合わせるという側面を満足させなければならない。このような構図にすると難問となるが、実は子どもたちは同じ方向に視線を向け、このハードルを一気に乗り越えてしまう。濃淡は確かにあるのだろうが、生活の場を共有する者同士の言葉にならぬ相互理解が育まれ、当事者間の了解が図られているのであろう。「空まで登るぞ!!」（やまぐみ：4歳児）の竹のぼり、「ドラムのり」（うみぐみ：5歳児）は、子ども一人ひとりにとっての晴れ舞台である。誰もがその身体能力に脱帽する。いや、保護者にとっては見慣れたひとこまに過ぎないのだろうか。その生身の身体には洗練された高度な能力が備わっている。簡単に語ることは許されないが、今一度、0歳児や1歳児の姿に立ち戻るならば、その先に今日の4・5歳児姿があるのも頷ける。しかし、このような高みからの見下ろし方は、子どもが今この瞬間に身体を駆使する姿と対極にある。「けんこうまつり」

は、身体能力をどのように身につけるかを示すものではなく、今ある生活能力の身体的開示の機会であり、それを楽しみ、ともに喜ぶ場である。能力を身につけるために何をしなければならぬという発想ではなく、生活をともにすることで生まれ、発揮される能力を称賛する世界である。

今一度、園長の言葉を想起しよう。「できたか、できなかったではない」とは何であり、「発達する姿」とは何であるのか。「発達」⁽¹⁸⁾の指標は「できたか」「できなかった」によってなされがちである。その脈絡からいうと、あじさいの子どもたちの身体能力は、ずば抜けている。これは、多くの保育園児・幼稚園児を見ている者にとって簡単に導きだせる結論である。私は「できること」をないがしろにしたくないし、素直に称賛したい。だが、それとともに、大切なことがある。それは、「できる」心身の力を使って、その子らしい生活、その子ならではの歩み方を促すことではないか。どう獲得するかを前提にした保育ではなく、「手持ちの力」を発揮できる環境を優先することを重視したい。特に、障がいのある子に対してはこの発想が欠かせない。今、この時に身につけているだろう能力を十二分に発揮できる場や機会を環境として提供することに腐心したい。

「けんこうまつり」はその格好の場であり、機会であった。だから、先の「高みからの見下ろし方」は、一律的な到達目標を示し、その目標に向かって個を引っ張りあげる保育観に陥る危うさがある。浜田氏は、「発達というのは、素朴に言えば、新たな力を身につけていくことである。そして、身につけた力は、本来、たっぴいま生きている自らの生活世界のなかで使うものであって、将来のために貯めておくものではない。」さらに、「力を身につけるということは、そこにその力を使って生きる新たな世界がひろがるということにほかならない。」とも言う⁽¹⁹⁾。取り組んだことのなかに、「ドラムのり」や「親子バンバ」など帯広らしい地域性が含まれていたことも印象的である。今回は、体育館で実施されたがこれは決してマイナスではなかった。勿論、青空のもとでの「まつり」も是非見学したいが、どんな場にも対応するスタッフの運営能力には脱帽する。「周的な準備と運営、それを可能にする組織力」、「計画性、役割分担、人の動きと連携、モノの準備、時間配分、場の構成等々」まさに鍛錬された保育計画そのものである。

6. 札内川に遊ぶ

子どもたちは札内川に遊ぶ。北海道の短い夏を川遊びで楽しむのは、園創立以来一貫している。卒園児がその記憶をたどると行き着く遊びの一つに川遊びがある。先に取り上げた「30年記念誌」には、第1期生(1978年度)から29期生(2006年度)までの各期の卒園生と担任の保育者が当時を振り返って手記を寄せている。そこには、札内川での遊びが頻繁に出てくる。たとえば5期生(1982年)は、「夏の札内川遊びも日課の一つで、パンツ一枚で真っ黒に日焼けして風呂に入る時、パンツの跡が目には射るほど白く見えたものでした。」。また、11期生は、「一番よく行ったのは近くの札内川です。川で遊んだり堤防で虫を観察したりして色々な遊びがありました。札内川で石を拾ってきて、それを割ってキャンプで材料を切るための石包丁を作ったりもしました。」と語ってい

る⁽²⁰⁾。

旧園舎の時も現園舎になってからも20～30分程歩くと川に行き着くが、その道すがらは近所の人と挨拶をしたり、犬に声をかけたり、気に入った葉っぱを見つけて喜び、それぞれが思い思いに興味の対象を見つけながら歩を進める。この日は、4歳から5歳までの40人程が、着替えなどが入ったザックを背負い歩を進める。なかには長靴をはいている子もいる。手をつなぐ者同士、どのような会話を交わしているのだろうか。遅れがちの子に歩くことを促す仲間がいたり、ふと前を見たら遅れていることに気づきあわてて走り出す子がいたり、陽射しのなかありふれた日常の風景がここにある。手をつなぎ、気持ちを緩めて、まさにのどかである。札内川での遊びは特別なことではなく、いつもの遊びの範疇にあり、川への道も淡々とした光景が映し出される。言葉を交わし、ちょっかいを出し、ふざけたり、水たまりに踏み入れたり、何気ない一コマコマでしかない。遊びに夢中になるとことん楽しんでる姿、あるいは仲間との力感ある遊び、そうした凝縮した時間とともにこうした心身を弛緩させたひとときがつけられている。何の作為もなく、他愛のないやりとりができる関係、その関係は自分の居場所であるから多少の我儘な振舞いは許される。弛む時間だからこそ垣間見える子どもの様子として記憶にとどめておこう。一直線に目的地に向かうことから生まれない仲間との関係がここにはある。それは、これから遊ぶ札内川の流れと重なるものである。

さて、到着した子どもたちは着替えをする。水着姿もいれば下着姿の子もいる。保育者は、全員を集めて指示するわけでもなく、注意を促すわけでもない。川に入る子、川原で遊ぶ子、川原にたまった水の中を行き来する子、様々である。保育者と5・6人の子が輪になって手をつなぎ遊んでいる。水をかけ合ってはしゃいでいる。ビニール袋を手小さな魚を探している子もいる。ビニール袋に水を入れて、掛け合っている子もいる。川底は石が多いため素足だと歩きにくく、ゆっくり歩を進めるが、なかにはひっくり返る子もいる。長靴は水辺で遊ぶためであり、石の上を歩くためであることがわかる。保育者の様子をみるとそれぞれが遊びのグループに入りしっかり遊んでいる。その中の一人は、子どもが遊ぶ場所としては、「ここまで」という場において子どもを相手にしている。離れたところに位置しながら互いに連携をとり、かつ楽しんでいる。

堤防に2人の女の子が寄り添って座り、何やら話している。水着姿で長靴。少し寒そうではあるが、近寄りたがたい二人だけの世界がそこにはある。周りでの遊びや川からの嬌声にも我関せずと、おしゃべり三昧である。また、堤防付近の草むらで虫探しの子がいたり、川遊びの魅力は、多様性にある。何か面白いことに遭遇したり、偶然に何かが始ったり、おもわぬ展開があったり、子どもたちにとっては、未知の部分や新しい発見、新しい関係が期待できる環境に違いない。先の記念誌では、「札内川」は「遊びの基地」（12期生担任保育者）と表現しているが、「札内川の石」は、「キャンプで材料を切るための石包丁」に変わる。スムーズな歩きを妨げる石は、「キャンプ」では食料を刻むための貴重な道具になる⁽²¹⁾。川遊びは、場と時間を変えて、新しい経験を生み出す。

札内川は、子どもの遊び場をかるうじて残した⁽²²⁾。開園の頃に遊んだ「札内川の河川敷は、う

っそうとした森の中に水たまりが沢山あって、子ども達にとってなくてはならない自然の宝庫であったが、1981年から護岸工事が始まり河川敷は「年々、姿を変えていく」。1995・6年に工事はピークとなり、「パークゴルフ場の完成、防災ステーションの完成、土手のアスファルト化、残された川べりの護岸の完成進められ、現在の形」になった。そして、整備されたパークゴルフ場隣の空き地に、「小さいけれど木が生えて来、雑草が沢山背たけを伸ばした」場ができ、「せめてこの場所は子ども達のため残したい」と道開発局、市公園課と交渉し、要望書(1996年7月)を提出している。その主な内容は、「河川敷の自然を守る」、「土手の登り口に歩道をつける」等であるが、背景には「子ども達の遊び場は鉄とコンクリートの遊具が並ぶ作られた狭い公園ばかりになり」、「大人向けの遊び場が、どんどん増え、子どもの「格好の遊び場の空き地も河川敷も奪われてしまった」ことへの危機意識があった。開発局は「札内川は急流河川」で「洪水を予防するための護岸工事」として位置づけつつも、「水辺の緑」の保全や「生態系への配慮」、「川に親しむ」護岸整備等にもシフトするようになり、園からの要望を好意的に受けとめ、要望していた「歩道」に代わる「子ども専用階段」(1997年10月完成)も設置した。園では、要望書のなかで「遊びの基地」としての札内川の河川敷について次のように述べている。少し長いが引用する。「札内川の河川敷は木々の間の探検、四季折々の草花との触れ合い、流れを利用したの川遊び、魚すくいに魚釣り、柳の木を使っのチャンバラごっこ、石投げ、石割り、草の間のかくれんぼ等々数えあげればきりが無いほどの自然の宝庫」であると。「治水」目的の「等速の流れ」⁽²³⁾に対抗してゆっくりと不均等な流れ故に生まれる遊び場を対置したのである。効率性を重視した高速で均一な流れをつくるための改修と子どもの遊びは相容れないものである。子どもの遊びは、それ自体を楽しむものであり、遊びが持つ「自由性」と「可変性」は、かつての河川敷に在った「うっそうとした森の中」だからこそ十分に発揮されたのであろう。遊び場は、無駄や余分、隙間から生まれる。用途が明確で入り込む余地のないものにおもしろさは見出せない。子どもたちにとって等身大の流れがわずかでも残されたことの意義ははかり知れない。子どもの育ちは、曲がりくねって、漂うようにゆっくりで、流路も勢いもさまざまである。それに対して、コンクリート護岸の流れは一気で直線的であるが、この流れに抗う価値を河川敷の一部に表象した意味は大きい。

まとめ

「人間のもつすべての機能や側面はその身体性に根ざし、成長発達後も、それぞれの行為のもっとも基盤」となる⁽²⁴⁾。身体こそがその子の存在の現れである。その一つとして、乳児のすべり台での様子は、「手持ちの力」を身体に凝集し、能動的な力をみなぎらせる姿であった。一方で、リズム遊びは、身体が感応し合う楽しさを示していた。また、そり遊びと川遊びはその身体を自然と交差させ、その経験を身体に統合し新たな能力を身につける。こうした子どもの姿は、あじさい保育園の保育実践に見出したもので、園の保育理念・保育観、保育内容の具体、日々の子ど

も同士の関係や子どもと保育者等の実在的关系を抜きに考えられない。つまり、子どもの育ちに関する普遍的概念としてはじめから定立していたわけではない。保育実践の渦中にある身体として、その子の周囲にある関係のなかで今ある力を発揮し、新たな力を我がものとしてきたのである。

さて、あじさい保育園での遊びや活動は、自然との対的関係のなかで展開しているものが目立つ。日常的な保育、育ちの節目となる行事、人間の力を超絶した自然ではあるが、だからといって自然の前に無力な存在としてではなく、ままならぬ環境に身をおく者として、どのようにかわり、振る舞うかを遊びとして展開する。自然を相手にした遊びには、未知数で予期せぬことが多い。偶然性に依拠した面白さもある。自然は懐が深いだけに、遊びの発想と展開においては「自在性」に富む。定型的な遊びとは異なる次元で「手持ちの力」を動員し、今を楽しむ。その典型をそり遊びに見た。一見、繰り返しの思いがちであるが、個別の滑りに決して同じものはない。雪の状態、雪面、デコボコなどの形状、仲間の様子、滑る主体は滑るための技法を経験的に見につけているが、一方では新たな楽しみに遭遇することを期待している。つまり、それはソリとともに雪の中に転がり思わぬ展開になることである。いや、思わぬ事態ではなく期待通りというべきか。こうした楽しみの真っ只中に身体がある。身体が経験を刻み、その経験を駆使して滑り、同時に新たな能力が身につく。もちろん、能力はソリ遊びだけで身につくわけではなく、その子の生活総体で培われ、そして生活の営みに還元される。

あじさい保育園では、「キャンプ(年長児)」、親子による「ふきとり」、「そりえんそく」など自然を対象化した遊びや行事が多い。今後は、その様子も視野に入れながら身体の営みについて取り上げていきたい。

注

- (1) 五味太郎(2007)「からだのみなさん」福音館書店、1-28頁。
- (2) あじさい保育園(2009)「共に生きる・能動的に生きる力を育てる保育」、5頁。平成21年度全国私立保育連盟「保育総合研修会」資料。
- (3) 岡本夏木(2005)「幼児期」岩波新書、77-78頁。
- (4) 佐藤公治(2007)「発達の根源への問い」(『子ども発達臨床研究』北海道大学大学院教育学研究科、創刊号)、30-31頁。

- (5) 「環世界」についてはヤーコプ・フォン・ユクスキュルほか(日高敏隆・羽田節子訳(2011)「生物から見た世界」岩波文庫を参照。原著は1934年。動物行動学者の先駆者の一人であるフォン・ユクスキュルの提示した「環世界」について、訳者の日高敏隆は、そのあとがきで「環境」はある主体のまわりに単に存在しているものであるが、「環世界」はそれとは異なって、その主体が意味を与えて構築した世界」であると解説している。ユクスキュルは、「主体が知覚するものはすべてその知覚世界になり、作用するものはすべて作用世界」になり、「知覚世界と作用世界が連れだって環世界という一つの完結した全体を作り上げている」(7頁)と述べ、「単純な動物には単純な環世界が、複雑な動物にはそれに見合った豊かな構造の環世界が対応し」(前掲20頁)、それぞれが意味ある環境を構成することを指摘している。
- (6) 社会福祉法人弥生福祉会 あじさい保育園(2007)「あじさいーあじさい保育園創立30年記念誌ー」(以下「30年記念誌」)。
- (7) 前掲書、11頁。
- (8) 浜田寿美男(2009)「子ども学序説」岩波書店、5頁。
- (9) 浜田、前掲書、7-8頁。
- (10) 浜田、前掲書、6頁。
- (11) 浜田、前掲書、14頁。
- (12) 「30年記念誌」、91頁。
- (13) 内山節(1993)「時間についての十二章」岩波書店、111-113頁。
- (14) 児嶋輝美(2004)「リズム遊び」、森上史朗ほか『保育用語辞典』、ミネルヴァ書房、83頁。
- (15) 森司朗(1999)「幼児の「からだ」の共振に関して」日本保育学会『保育学研究 第37巻第2号』、砂上史子(2000)「ごっこ遊びにおける身体とイメージーイメージの共有として他者と同じ動きをすることー」日本保育学会『保育学研究 第38巻第2号』を参照。
- (16) 「30年記念誌」によると1988年に「運動会」から「けんこうまつり」に変更。
- (17) 柳田国男「明治大正史 世相篇」(『日本の名著』1984、中央公論社)は、明治・大正から近代への変容を日常の小さな事実を基に綴ったものである。その中で「褻^けと晴^{はれ}との混乱、すなわちまれに出現するところの興奮というものの意義を、だんだんに軽く見るようになった」(86頁)と、「ケ」は日常を示す言葉として、「ハレ」を祭礼行事などの「まれに出現する」非日常と表現している。例えば、「外で飯をくうこと」というタイトルでは、「料理茶屋」の料理は「晴れである以上は盛装した給仕者と、酒を伴うのも不思議ではない。」とし、「茶漬^けは民間では褻^けの食事を意味した。」と記述している。なお、原著は1930年である。

また、本田和子(1992)「異文化としての子ども」紀伊國屋書店、では「縁日の幕は子どもによって引き開けられる。未だ人々は常の日の営みの中にあり、祭礼の時も訪れていないのに、子どもたちは、はやばやと参道筋や境内に出没する。」、そして「子どもたちが「まだか、まだか」と動き廻るとき、寺社の界限は祝祭空間として徴づけられ、「ハレの日」のたたずまいに色めき立つ。」(66-67頁)と語り、縁日という「常ならぬ時空」のにない手である子どもに言及する。

以上の意味を踏まえ、「けんこうまつり」は、一人ひとりの子どもにとって「手持ちの力」を発揮する祝祭日でもある。

- (18) 本田和子(2005)「現代における乳幼児の発達課題と保育」日本保育学会『保育学研究 第43巻第1号』を参照。
- (19) 浜田、前掲書、103頁。
- (20) 「30年記念誌」、34・40頁。
- (21) 「30年記念誌」、36頁。
- (22) 「30年記念誌」、95-98頁。
- (23) 内山、前掲書、3-16頁。
- (24) 岡本、前掲書、78頁。

参考文献

- 岡本夏木 (2005) 「幼児期—子どもの世界をどうつかむか—」 岩波新書
- 浜田寿美男 (2009) 「子ども学序説」 岩波書店
- 佐藤公治 (2008) 「保育の中の発達の姿」 萌文書林
- 野村庄吾 (2008) 「乳幼児の世界—こころの発達—」 岩波新書
- 岡本夏木・浜田寿美男 (1995) 「発達心理学入門」 岩波書店
- 内山節 (1993) 「時間についての十二章—哲学における時間の問題—」 岩波書店
- 内山節 (1996) 「子どもたちの時間 山村から教育をみる」 岩波書店
- 佐伯胖編 (2007) 「共感—育ち合う保育のなかで—」 ミネルヴァ書房
- 佐伯胖 (2001) 「幼児教育へのいざない」 東京大学出版会